

別紙 4

報告番号	第	号
------	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

青年期の援助要請にかかわる社会的要因
友人と教師の役割に着目して

氏 名

後藤 綾文

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、青年期の援助要請を促進する効果的な支援への示唆を得るため、周囲に存在する身近な友人や教師という社会的要因に焦点を当て、援助要請との関連について実証的な検討を行った。

第1章では、援助要請に関する先行研究を概観し、問題の所在を指摘したうえで本論文の目的を示した。第1節では、本研究を行う社会的背景を挙げ、援助要請の重要性を述べた。第2節では、仲間との集団的同一性の重視や社会的視点取得能力の発達などの青年期の発達的特徴をふまえたうえで、援助要請にかかわる要因を探る必要性を指摘した。第3節では、前節で挙げた青年期の発達的特徴をふまえ、周囲の他者や所属集団という社会的要因に着目する有効性について検討を行った。先行研究では援助要請の促進を目指して、援助要請を行うことのできる個人や援助要請を控える個人の内的要因が着目されており、周囲の他者や所属集団という社会的要因の影響を受けるプロセスは未だ実証的に検証されてきていない。しかし、先行研究から、周囲の友人との関係がどのようなものであるのか(関係性)、お互いに援助要請を行うことを周囲の友人と認め合っているかどうか(共有性)が援助要請には関わっていることや、教師がどのように子どもたちと関わり働きかけるかが青年期の若者の援助要請に影響を及ぼすことが示唆された。そして、社会的要因と援助要請との関連を明らかにすることで、援助要請を促進する新たな支援アプローチを得ることができると可能性を指摘した。第4節では、援助要請という概念の整理を行い、小学生から大学生までの学校段階ごとの援助要請研究を概観した。中学生段階以降は友人が援助要請の対象者として最も選択されるものの、援助要請を行った場合に友人にどのように思われるのか懸念や不安が高く、社会的要因である友人の役割の複雑性を指摘した。第5節では、これらの問題点を踏まえて、本論文の目的について提示した。

第2章では、援助要請の対象者を選択するにあたって、その選択に友人との関係性が

どのようにかかわっているのかという点から，援助要請における友人の役割について検討を行った。研究 1 では，大学生を対象に，学生相談，友人，家族，教職員，インターネットという 5 つのサポート源への援助要請意図と友人関係に対する不安との関連を検討した。5 つのサポート源への援助要請意図を用いてクラスター分析を行った結果，友人への援助要請意図が高いものの，インターネットも合わせて選択する群の存在が示された。サポート源の選択タイプと友人関係に対する不安との関連について分散分析を行った結果，この友人とインターネットを選択する群は，友人と同じかどうか気になり，友人にどのように見られるのかという不安が最も高いことが示された。また，どのサポート源への援助要請意図も低い群は，友人関係に対する不安が低く，友人との関わりを避けていることが推測された。研究 2 では，中学生を対象に，教師と友人という 2 つのサポート源への援助要請意図と，友人との仲の良さと援助不安（呼応性の不安）との関連を検討した。2 つのサポート源への援助要請意図を用いてクラスター分析を行った結果，教師及び友人への援助要請意図がともに低い群の存在が示された。この群は，友人との仲の良さが低く，援助不安が高いことが示された。研究 1 と研究 2 の結果より，援助要請を行う対象者の選択にはタイプがいくつか見られ，そのタイプごとに，友人との関係性には差異があることが示された。また，青年期において，友人との関係性と援助要請との関連は，発達段階ごとで異なることが示唆された。

第 3 章では，友人との関係における，協力や援助要請についての価値観や態度，考えがどれくらい共有されているかという点から，援助要請における友人の役割について検討を行った。研究 1 では，大学生を対象にペアデータを収集し，関係効力性がペア間で共有されている程度とペア間で差がある程度と，援助不安との関連を検討した。分散分析の結果，関係効力性を共有している程度が高いほど，援助不安の中でも呼応性の不安が低いことが示された。研究 2 では，中学生を対象に，同じ学級に所属するクラスメイトの援助要請態度と生徒個人の援助要請態度の両面に着目した。生徒個人とクラスメイトの間で援助要請態度が共有されている程度と差がある程度と，援助不安との関連を検討した。分散分析の結果，学習面の悩みに対する援助要請態度を共有している程度が高いほど，援助不安の中でも汚名の不安が低いことが示された。呼応性の不安については，生徒と学級のクラスメイトとの間で学習面の援助要請態度に差が大きい場合も小さい場合も，共有された援助要請態度が高いならば呼応性の不安が低いことが示された。心理面の悩みに対する援助要請態度を共有している程度と差がある程度と，汚名の不安に関連は見出されなかった。呼応性の不安については，共有されている程度が低い場合に，差が小さい方が呼応性の不安が低いこと，共有されている程度が高い場合には，お互いの差がどの

程度であっても呼応性の不安が低いことが示された。悩みの種別や共有されている程度によって、差の程度による効果に違いがあることが示唆された。さらに、生徒個人が認知する学級のクラスメイトの援助要請態度が、生徒個人の援助要請態度や援助不安に直接的に影響を及ぼし、援助要請意図を間接的に促進する結果も得られた。研究3と研究4の結果より、お互いの関係が援助要請を行いあえること、援助要請を受け入れ合える関係であることを共有できている場合に、援助不安が低く、援助要請意図が高くなる傾向が示された。これより、青年期の援助要請を検討する際に友人との共有性に着目する重要性が示唆された。

第4章では、中学生の周囲に存在する他者の中でも大きな影響を及ぼしうる教師に着目し、中学生の援助要請に及ぼす影響について、縦断調査を行い検討した。まず、生徒から教師への援助要請を促す教師の働きかけと、生徒同士の援助要請を促す教師の働きかけを新たに提唱し、尺度作成を行った。教師への信頼感と教師サポートとの関連から、作成した尺度における一定の信頼性と妥当性が示された。次に、教師への援助要請意図とクラスメイトへの援助要請意図の学級間差や教師の働きかけによる援助要請意図の変化への影響について検討を行った。階層線形モデリングによる分析の結果、2つの教師の働きかけは教師への援助要請意図とクラスメイトへの援助要請意図を高めることが示された。この2つの働きかけは、教師が生徒に対して、質問や悩みがないか普段から話しかけることや質問や相談を親身に受け止めること、質問や相談は生徒自身のためになると伝えること、生徒同士で質問や相談をして取り組むようにすすめることやクラスメイトからヒントやアドバイスをもらうことは大事なことだと言うことなど、援助要請の積極的意義や肯定的態度を示すものである。日常の学校生活の中で、教師が援助要請の積極的意義や肯定的態度を示すことで、学級全体として援助要請を行いやすい雰囲気をつくりうる教師の働きかけの有効性が示唆された。

第5章では、これまでの研究によって得られた知見を整理し、本論文の意義と今後の課題・展望が議論された。本論文は、青年期の援助要請にかかわる社会的要因として友人と教師に着目し、その関連を実証的に明らかにした。まず、中学生と大学生を対象にし、友人との関係性と友人との共有性という視点から青年期の援助要請の特徴を詳細に検討し、発達段階ごとの相違を示した。次に、教師への援助要請を促す働きかけと生徒同士の援助要請を促す働きかけを取り上げ、中学生の援助要請に及ぼす影響を明らかにした。日常的なかかわりの中での教師の働きかけに着目し、さらに教師が生徒同士の援助要請にまで働きかけをすることができると示した点は、国内外で見当たらず、援助要請を促進させる支援の新たなアプローチを提供

できたといえる。特定の友人ではなく、同じ学級のクラスメイトへの援助要請という、より幅の広い援助要請への可能性も示した点も意義がある。また、本研究で得られた知見をもとに、日頃より、他者が自分のことを受け入れてくれるだろうと思える人間関係を形成すること、援助要請を行うことを肯定的に受け止める態度や価値観を所属集団内で形成することに焦点を当てて、援助要請を促進するための支援について議論した。今後の課題として、本研究はすべて調査研究であり、実践研究や介入研究により、本研究で示された関連や因果関係を検討する必要性が挙げられる。また、本研究では援助要請にかかわる社会的要因に焦点を当てたが、援助要請の性質をふまえると、個人要因と社会的要因間の相互の関連及び相互の影響も想定される。そのため、この点についても今後さらに詳細な検討を行う必要がある。